

『とりかへばや』の「笑い」と「涙」

— 歪んだ笑い —

はじめに

『とりかへばや』で中心となる人物は大将(♀)と尚侍(♂)で、二人は本来の生とは逆の性で生きている。女が男として生き、男が女として生きる……そのような特殊な環境下で生活する彼らが中心人物である限り、物語から「演技」という要素を切り離すことはできない。女が男の演技をし、男が女の演技をする。その「演技」という要素は彼らにとつてどの程度自覚され、行われているものなのだろうか。私は、彼らが無自覚に行っているように思えて仕方がない。「演技」が当然すぎて、演技をしていることさえ忘れてるようを感じるのだ。

そうなると、時として自分の感情と深く結びついている行動さえ、無自覚のままに「演技」を含んでいることになるのかもしれない。

弓野 瞳

人物の些細なしぐさや視線、または抑えつけようとしても体内から溢れ出してしまうもの、それらは人と人との関係に取りこまれ、埋もれてしまい、作品中でそれほど大きな役割を果たしていないように思える。しかし、彼らの感情と行動の微妙な「ずれ」を考えていくと、私はそれらのようなことにこそ、作品を読み解く鍵があるのではないかと思うのである。

日常生活の中で繰り広げられる些細な行為を丁寧に読みこむことによつて、その奥にある、当事者でさえも感知し得ない何かを読み解きたいと考え、私は作品中多くの用例があり、それらが重要な意味を持つと思われる「笑い」と「涙」について考察することにした。生きる中で当然のこととして通りすぎてしまう「笑い」や「涙」、これらから『とりかへばや』の作品の中における歪みを浮き上げられ、その裏にあるものを見つけれられたらと思っている。

一 大将の笑い

自分の性とは異った生活を送る大将(○十)はこの作品の中で最も多く笑う人物である。しかし、大将(○十)の「笑い」は肯定的な感情の中ではなく否定的な感情の中で行われることが多い。なぜ大将(○十)は否定的な感情の中で笑わなければならなかったのだろうか。まず、大将(○十)の初めての笑いについて見てみる。

いと高き人の子供などあまた率て、碁・双六打ち、はなやかに笑ひのふしり、鞠・小弓など遊ぶも、いと様ことにめづらかなり。
(卷一・一一一)

この大将(○十)の笑いには自分の思いのままに笑っている、自由で快活な笑いである。しかし、これからあげていく、これ以降の大将(○十)の笑いには、「うち」がつくようになり、このような快活な様子はもはや見ることができない。最初の笑いとはそれ以後の笑いを比較してみると、違いは元服と「宮仕え」にあるのではないかと思いたる。最初の笑いは宮仕え前であり、次からの笑いは宮仕え後の笑いだからである。しかし、本当にこれだけで大将(○十)の笑いが変わっていくのだろうか。大将(○十)の笑いの変化とその意味について知るために、これから否定的な感情下での大将(○十)の笑いについてより詳細に考えていきたい。

大将(○十)の「笑い」は、I「大将(○十) ↓ 四の君」、II「大将(○十) ↓ 宰相」、III「大将(○十) ↓ 大将(○十) 自身」と笑いかけた対象の違いによって分けることができる。まず、最初に考えていきたいのは「I大将(○十) ↓ 四の君」への笑いである。

① えもいはず、にほひやかにうちほく笑みて臥し給へるを見るに、いとどしき心地は、泣き沈み給へるも、こしらふべき言の葉もおぼえねば、
(卷一・一四七)

② たゞなる時だにいみじう恥づかしげに、おぼろけの人見えにくきを、まいて思ふ心あり、打ほく笑みて、「これはいかゞが御覧する。この世には人のかたみの面影をわが身に添へてあられとやみん」
(卷二・一七三)

四の君は世間体をつくらう妻であるが二人の関係は親しいものであった。しかし、四の君と宰相の密通により、大将(○十)は四の君を失い、自分の秘密までも暴かれてしまうのではないかという危惧に晒されている。宮仕えという区切りによって自由な笑いを失った大将(○十)であるが、この宰相と四の君の密通という事件を通して、新しい「笑い」を手に入れる。この①と②の、辛く苦しい中の「笑い」である。大将(○十)は密通という行為によって自分の身の異常さをまざまざと感じ、今までの自分に対しての自信を喪失している。なぜこのような状態で大将(○十)は笑おうとするのだろうか

か。またこのような状態の中での「笑い」にはどのような意味があるのだろうか。

大将(○)は四の君に対して、理性的な部分では「いづくを恨みところにかは」(宰相の好き心や四の君の裏切りのどこをとっても恨みようがない)と思っているのであるが、その下にある深い部分では自分を裏切った人への恨みや憎しみがなかったとは言いきれない。「いとしも心動くほどの心やましさはなきなるべし」(特別に心が騒ぐほどの嫉妬心はないようだ)は「大将(○) ↓ 宰相」への嫉妬心であるようにも思えるが、「大将(○) ↓ 四の君」への隠れた恨みであり、同じ女としての嫉妬心であるようにも思える。自分の中にある四の君へのわだかまりを否定することによって、逆にその思いが確認されていくのだ。従ってそのような思いを秘めている大将(○)の笑いには、悲しみだけではなく、四の君を非難する思いが込められているように思える。

笑うという行為について、中川米造は「歯をむき出すのは、本来は攻撃性の表現である。それが警戒心の解除や、防衛反応の解消とは妙な解釈であるが、それは、儀式化された攻撃性であるとすれば何とか納得がいく」と言っている。⁽¹⁾ さらにローレンツは「多くの動物の場合に威嚇するということは、歯、くちばし、つめ、つばさ、あるいはこぶしといった武器を相手に向かって意味深長な様子でさ

しむけ、『鼻先につきつける』ことだ」と言う。⁽²⁾ 歯を見せる行為は本来攻撃的な行動であり、それを儀式化したといえる。「笑い」は、もともと攻撃性をもっているということができらるだろう。柳田国男は「笑いは一つの攻撃方法である」と言いきっている。⁽³⁾

これらのことを踏まえながら、もう一度先ほどの①「にほひやかにうちほゝ笑みて臥し給へるを見るに」②「まいて思ふ心あり、打ほゝ笑みて」という二つの大将(○)の笑いについて考えると、「大将(○) ↓ 四の君」への笑いには攻撃的な要素が含まれているといえるのではないだろうか。①では大将(○)は四の君にほゝ笑みかけることで四の君を慰めているようにみえるのだが、実際は四の君を追い詰めているのである。それは大将(○)の「男として生きる自分」のプライドを守るためでもあり、自覚していない部分で働いている同じ「女」としての嫉妬という思いからくるものでもあるだろう。

悲しみの中での笑いとは攻撃性を含むことによって、男として生きるためのプライドを守り、また無自覚に働く同じ女としての嫉妬を認めるものとなっている。

では、この四の君を寝取った宰相に対しての「大将(○) ↓ 宰相」の笑いはどのようなものであるのだろうか。宰相は四の君を寝取っただけでは飽きたらず、大将(○)を犯して宇治に監禁して、

我が物顔に大将(○)を扱っている人物である。女として囲われる身になった大将(○)はどのように笑うようになるのか、これから見ていきたい。

先ほどのⅠ「大将(○)Ⅱ四の君」は攻撃性を持つものであると述べたが、次に、Ⅱ「大将(○)Ⅲ宰相」の持つ意味について考察したい。

二 笑いの変化

③「まだ見ぬ心地のする人の有つるを、さ言ふめりつれば、もし我身の身を離れけるにや」とぞほゝ笑むものから、涙の落ちぬるを、

(卷三・二三八)

都から宇治の別荘に帰ってきた宰相に、「行方不明の大将(実は大身後の尚侍(○))を見た」と女房が告げた場面である。その報告を聞いた宰相は『行方不明の大将』は女として今ここにいるのだ」と女房の発言を優越感の笑いで笑いながらも、大将(○)を「男が入り出すなどというのは、あなたに他に男がいるのではないか」と責めたてる。大将(○)はここでも悲しみと屈辱の中で笑い、耐え兼ねて涙を流す。この大将(○)の笑いはⅠのような優位者としての笑いではなく、逆に被庇護者としての笑いである。妊娠中であるため男姿に戻ることもできず、またこの宇治から逃げ出す

こともできない。大将(○)の現状は拘束されたものであり、自分勝手な行動は許されない。そのような立場にいる大将(○)がとつた行動は「笑う」ことなのだ。

大将(○)はなぜ苦しみの中で笑うのだろうか。私はこの大将(○)の笑いに、弱い立場にあるものの妥協と譲歩の笑いを感じる。嫌だとは思いつつも、庇護下にいることで無意識に相手の様子をうかがってしまうのである。笑いかけることで宰相からの愛着や優しさを引き出し、立場を守ろうとする、という要素が強くなった時、この笑いは乳児が本能的に庇護を求めて笑う「笑い」と繋がっていくことになるのだろう。この笑いからは、「涙だけではなく笑いによつても事態を收拾させる、男としての知恵と、女としての媚態を合わせ持つ存在を感じることができるよう思う。

それでは、もう一つの「大将(○)Ⅲ宰相」の笑いについて考えてみる。

④わりなくほひやかにうちほゝ笑みて、「度ごとの御ことわりこそ、おぼし知るにつけて中くくなれ。物は思ひ知らぬこそよけれ」との給へるは、くねくしく言ひ恨みんよりも恐ろしければ(中略)恐ろしくかへり見がちにて、出でもやらす(中略)若君抱きて、つゆまじろまず泣き給ふ。(卷三・二五九)

これも③と同じように宰相の庇護下において宰相の愛着を求める

ための笑いであろうか。私はそうは思わない。④の場面はすでに今大将(○)と出会い、宇治を抜け出す算段をした後の「大将(○)⇩宰相」の笑いである。大将(○)は逃げ出す計画を成功させるために、あえて宰相を都に在るライバルの君の元へ送り出そうとしている。そのために行ったのがこの④の笑いである。大将(○)は今大将(○)の出現によって、これからは宰相に頼らなくても生きていけるという思いがある。今まで、身元を隠して生きるために宰相と共に生活してきた大将(○)であるが、その枷が外れた時、どうして宰相の庇護を求める笑いを笑うだろうか。この④の「笑い」は、今まで辛い思いをしてきた大将(○)が宰相に対して放った不満や恨みの集積であり、また宰相の思いの裏をかくという嘲りの思いが含まれたものであるように思える。つまり、Iで述べたような、攻撃性を底流させた笑いに似ているように思われるのである。

この場面で、宰相は「限りなきけしきにかき撫でつ」と大将(○)の髪をかき撫でて、大将(○)を支配しているように見える。しかしそれは表面的なことと止まり、大将(○)は宰相に対して攻撃性を含んだ笑いによって拒絶し、反撥していたのである。宰相はそのような大将(○)の態度に「くねくねしく言ひ恨みんよりも恐ろしければ」「恐ろしくかへり見がちにて」と恐ろしさをかすかに感じていた。しかし大将(○)を完全に支配していると思いがつ

ている宰相は、それでもその思いをつきつめることもなく、そのまま四の君の元へと出かけて行くのである。

II「大将(○)⇩宰相」の笑いは、始めのうち本心からではないが、宰相の庇護を求めるようなものであった。それが妊娠と出産を経て変化し、今度は宰相を欺き、さらには宰相に対しての反撥を含むものへと転換していった。その変化の根底には、大将(○)を取り巻く環境の変化があり、意識の変化がある。宮仕えをしてからは演技を必要とする笑いばかりだったのだが、このIIを見ると、大将(○)の笑いには、やはり抑えられた感情の動きが関係しているのだと確認することができる。

三 自分に向き合う笑い

では最後の、III「大将(○)⇩大将(○)」という自分自身に向き合う形の笑いについて見てみる。

⑤ 我にてはかひなくもあるかな、宮の宰相は、かゝる人世にも
のし給ふともいまだ聞きつけぬにやあらん、いかに聞きまどひ
心を尽くさんと、まつ思ひ出でられて、我身も嘆かしく、うち
笑まれ、月はくまなく霧わたりに、虫の声々乱りがはしく、
水の流れ・風の音・鹿の音などひとつに聞こえて、あはれを添
へ、涙をもよほすつまとある所のさま・人の御あたりなり。

⑤は宰相と四の君が密通したことによって、心に傷を抱いた大将(○)が、癒しを求めて吉野の宮の元に滞在している最中の一場面である。時期的にはⅡで述べた「大将(○)↓宰相」への笑いより前、Ⅰ「大将(○)↓四の君」への笑いの後である。吉野に滞在中、大将(○)は吉野の宮の娘である大君と歌を交わす。歌を交わすという行為は、一見すると一般的な恋人同士がとる行為となんら変わることがないものであるのだが、大君と歌を交わすことによって、大将(○)はより自分の内面を見つめていく。必要以上に自分の内面をネガティブに見ていくことは、傷ついて自信を失っている人間が陥りやすい態度である。

大将(○)は大君に歌を詠みかけることで、「我にてはかひなくもあるかな」と女としての自分を必要以上に認識することになっている。今まで、女でありながら男として生きてこられたのは、周りにいる男達よりも美しく才能豊かで、誰をも引きつける魅力がある。大将(○)自身も感じていたからであろう。しかし、四の君が大將(○)を裏切ったことによって、今まで大将(○)を支えていた自信の根底が崩壊し、男として生きることの苦しみを覚え始めていく。才能や努力、魅力や美貌でも乗り越えることの出来ない、性々という壁があることを、眼前に突きつけられたからである。

宰相と自分を比較し、宰相の方が自分よりも優秀で魅力的なのではないかという不安。その大将(○)の精神面での揺らぎは、直後の地の文でも「月はくまなく霧わたたりたるに、虫の声々乱りがはしく、水の流れ・風の音・鹿の音などひとつに聞こえて」と自然描写で表されている。精神的に不安定な大将(○)にとって、いつもはなんら気にしない自然の音までが乱りがわしく、気に障るものとなってしまっているのである。

自分自身を「笑う」ということは、自分自身を客観視することができていることである。なぜなら、自分を対象化できていない人物は、自分自身を笑うことさえもできないからである。大将(○)は自分が異常な生活をしていることの厳しさや辛さ等を再認識させられ、その生活を続けていく自信がなくなっている。しかし、そのような精神状態の中でも、現在の生活を続けていかなければならぬ大将(○)は、不安と恐れで錯乱してしまいそうな自分の精神を守るために、あえて自分自身を客観化し、自分とは別の次元で物事をとらえようとしているのであろう。別の次元で考えることによって、大将(○)は冷静さを取り戻し、また、「男」として生きていく自分に戻っていかうとしているのだ。

井上宏氏は『笑いの人間関係』において「笑いは、対象を笑うことで、多少とも対象を相対化して見るといふことを可能にする。絶

対的な価値と目されているものでも、笑いにかかるとそれも相対化する」とある。大将(○)にあてはめて考えてみると、大将(○)は、自分の不安や恐れなどを笑いによって客観化した相対化してしまおうと考えているということになる。自分の悩みを笑い、問題を相対化してしまうことで精神的な余裕がうまれてくる。大将(○)にとつて逃れることのできない「性の逆転」という運命を受け入れてこれからも男として生きていくために、「自分自身を笑う」という行為が必要であつたのだ。

I、II、IIIと見てきて分かるように、大将(○)は、負の感情の中でも必死に「笑顔」を作ろうと努力する。反発心を抱いているときも抱いていないときも、否定的な感情にとらわれているとき、「笑う」ことはできなくてもせめて「ほゝ笑む」という行為で顔の表情を笑顔という状態にしようとしている。

同じ女という立場から、四の君に視線を向けてみると、四の君は、そのような笑いを笑うことがないことに気づく。なぜ四の君には、無理して笑うことがないのだろうか。その答えは、二人の生き方の違いにあるのではないか。男として生きなければならぬ大将(○)とは違い、四の君は女として生きている。四の君は誰かの庇護下にいる状態が当たり前の人物なのだ。誰かに支配されて生きることに対して、疑問をもつことさえもない四の君は、辛いときや悲しいとき

に笑う必要性がないのだ。負の感情の中で笑うという行為があると、いうことには気づいているのかさえも疑問だ。

四の君の行動の例としてあげるのは、先ほど大将(○)の笑いの例としてあげた①と③の四の君への攻撃性をもった笑いに対してとつた四の君の行動である。四の君は大将(○)の批難を含んだ笑いに対して、ただ「聞き臥し給へる女君の御心地、耐えがたうかなしく、面のをき所なく嘆き乱れ給」(巻一・一四七)や、「との給へる恥づかしげさに、何事かは言はれ給はん。顔をひき入れ給へるも」

(巻二・一七三)などと、服の中に引きこもっていればよいのである。⁽⁶⁾しかし、自分が「男」として生きる大将(○)は、自分が庇護される立場でいることに反撥する。支配下に収まることを望まない大将(○)は、宰相の拘束を受け続けた宇治という密閉された空間の中でも、宰相の「笑い」という支配的な行為に対して涙をこぼしながらも「笑い」によってそれを受け、完全な支配を逃れようとしていた。

大将(○)が否定的な感情の中で「笑う」のは、大将(○)が一般的な女性の生き方とは違う生き方を望み、それを行うために努力しているからではないだろうか。しかし、それは逆に大将(○)が女性であることを強調することになっているともいえる。大将(○)は「社会」という空間で生きていくために、四の君のような一般的

な女性がもっていない余裕の「笑い」という武器をもっているのである。大将(○十)は、女性でありながら、男社会の中で生き抜くために、生きる道を切り開くために、否定的な感情の中で「笑う」ことが多いのであろう。

男性社会で生き抜くという大将(○十)ほどの特殊状況ではないが、源氏物語における六条院もまたひとつの社会を織りなしている。その六条院という特殊な社会で生きる紫の上の「笑い」もまた、自分の感情とは違う状況での「笑い」となっている。

・すこしほほ笑みて、「みづからの御心ながらだに、え定めたまふまじかなるを、ましてことわりも何も。いづこにとまるべきにか……」
(若菜上・一五七)

女三宮が降嫁してからの一場面である。紫の上は夜ごと女三宮の元に通って行く光源氏を思って袖を濡らしているのであるが、源氏の前では「笑顔」をみせている。

・うち笑ひて、「いまめかしくもなり返る御ありさまかな。昔を今に改め加へたまふほど、中空なる身のため苦しく」とて、さすがに涙ぐみ給へる
(若菜上・七八)

この場面も朧月夜の元に通って帰ってきた源氏に対する紫の上の対応である。他の女の元に通っている源氏に対して複雑な感情を抱いている紫の上であるが、その心を源氏に悟られないためには自

分の心と違った「表情」を見せなければならない。精神的に追い詰められた状況でありながら、源氏との関係を維持するために笑う。この「笑い」は攻撃的に相手を支配しようとするものではない。しかし、確実に源氏の胸に刻まれていくものとなっている。紫の上が真実の安堵を手に入れられる場は二条院にあり、この六条院は女が生きる「社会」なのだ。社会を生きる女は、生きていくために「笑い」という武器を身につけていくのだ。

おわりに

卒論では「笑い」に続いてさらに「涙」について論じた。この作品において「涙」が用いられる回数は「笑い」よりも多いため、「涙が」がどのような意味を含んで用いられているのかが気になったからだ。

涙についての用例を調べていくと、面白いことに大将(○十)よりも宰相の方が涙を流す場面が多いことが分かる。宰相は自分が悲しい時や、相手の方が悲しい時、相手に何かを求めている時など、非常に多くの場面で涙を流す。この作品の主人公としてあげることができ人物は大将(○十)であると考えられるのに、なぜ宰相が最も多くの涙を流す人物となっているのだろうか。大将(○十)が最も多くの涙を流す人物となり得なかったのは一体どのような理由からなの

であろうか。

涙を流す場面を考えていくと、悲しい時や訴える時、人はごく自然に涙を流していることに気づく。訴える時というイメージがわからないかもしれないが、「涙を武器にする」この言葉を聞いたことがない人は少ないはずだ。涙は対象となる人物の心中に同情や哀れみをわき起こらせ、対象者の心を動かす手助けをするものとなる。その働きを知っていても、知らなくても、涙を流しながら相手に何かを望んだ時、それは涙を武器として使用したということになるのだ。涙を見せる回数が作品中最も多い宰相は、悲しみや、何かを訴えることが作品中最も多かった人物といえるのだろうか。私はその答えは否であると思う。悲しみが最も多い人物は、宰相ではなく大将(○)である。大将(○)は女として生まれながら、自分で望んだとはいえ、男として生きている。その無謀さや辛さに気づいた時から、大将(○)の嘆きは誰よりも深刻であった。ではなぜ、大将(○)は宰相より多くの涙を流さないのか。

涙とは多くの人物達が「ほろ／＼といとど泣かるゝ」(巻二・一八六)のように、一般的に使用するものである。特殊な生き方をする大将(○)は、そのような「平凡な感情表現」となってしまう。「涙」だけでは足りないのである。大将(○)のように特殊な生き方を悲しみや絶望から支えるのには、自分の感情に溺れる「涙」で

はなく、自分を抑制する「笑い」が必要なのである。

つまり大将(○)の「涙」は訴えるものではなく、ひそかな抑制と攻撃性を含むものでなくてはならないのだ。大将(○)は涙では足りないものを「笑い」によって補完し、社会を生きることができない人物となっている。涙という一般的なもので満足できるのは、男であり、男として疑いなく生きる宰相なのだ。従って宰相は涙によって相手を巻き込むことの範疇で必要性が満たされている人物だということが出来るだろう。しかし、大将(○)はより演技性の強い笑いを必要とするのだ。

様々な人物たちのよそおわれた感情が、微妙にずれながらゆがんだ「笑い」、誇張された「涙」となって絶えず出現することこそ、『とりかへばや』の「笑い」と「涙」が、この作品の比類ない方法となっていることを示しているのではないだろうか。それらの「笑い」と「涙」を読み解くことは、作品中の人物一人一人に近づき、さらには作品全体を編み上げる「感情」の襞を知り得る道となるだろう。

○テキストは『新日本古典文学大系26 堤中納言物語・とりかへばや物語』によった。

注

- (1) 中川米造「笑い 泣く 性」玉川大学出版部・一九七九年。
- (2) コンラート・ローレンツ「攻撃1」(みずず科学ライブラリー) みずず書房・一九七〇年。
- (3) 柳田国男『笑の本願』(養徳社・昭和二十一年初出) 岩波書店・一九七九年収録。
- (4) C. E. Izard『感情心理学』(株式会社ナカニシヤ出版・一九九六年)の「喜び―実証的研究」よりでは新生児の微笑について書かれている。新生児の微笑は生得的な表出であり、その微笑によって母親との強い絆を引き出し、その絆を確実なものにするために、また他の人間との肯定的な社会的相互作用を促進するために人間の乳児にあらかじめプログラムされている。生後3カ月から5カ月までの間、乳児がどんな人間の顔にでも区別なく微笑するという事実は微笑によって引き出される優しさある行動が乳児の安寧と健康な発達にとって重要であることを証明している。
- (5) 井上宏「笑いの人間関係」講談社・一九八四年。
- (6) 四の君のひきこもりについて安田真一「(女)と(男)の世界―『とりかへばや』四の君をめくって―」(「物語(女と男) 新物語 研究3」有精堂出版・一九九五年収録) 参照。

(二〇〇一年 卒業)